



作品「CIRCLE WIND (風の環) -PAX2008-」  
 (2008年、イタリア産大理石)  
 ネイティブ・アメリカンの聖地、アメリカ・ワイオミング州の  
 デビルズタワーナショナルモニュメント(アメリカ合衆国・国定公園)内に永久設置

道具の使い方などもすべて、イタリアの職人から学びましたから。でも結局、アーティストになれずに石屋になる人が、イタリアにはけっこう大勢いますよ。

だから大事なものは、先ほどもいいましたが、作品をつくって、まずは自分が感動できるかどうかということ。できなければ他人が感動することはなく、お金の授受も成り立たない。一回は親戚や友人がお付き合いで買ってくれるからいいですよ。でもそれも二回はないからね。あとは全然知らない人たちが、その作品をほしと思うかどうか。

それは芸術だけではなく、どんな分野でも同じでしょうね。

「生命」をテーマに制作を続け、  
 魂に関する場所には自然に呼ばれる

——大理石に限らず、石の役割をどのようにお考えでしょうか？

**武藤** 地球というのは宇宙のなかの小惑星ですが、そのなかにもまた地域性があって、日本では木が主体で、ヨーロッパでは石が主体ですね。

それは気候風土や地理的な要素もとても関係していて、人間は自然のなかで生活しながら身近な素材を使ってきたわけです。それが日本の場合は木になって、ヨーロッパでは石。堅牢さなど、性質上の必要性もありますね。

そういう大きな地球という庭のなかで、私はたまたま日本に生まれ、やはり木の文化で育ったわけですが、かといって日本でも石は生活のなかで非常に重要な役割を担ってきましたね。ただ主演というより、どちらかというと脇役というか、見えない縁の下の力持ちのような使われ方が多かったでしょう。

でもそれが特に明治以降、西洋からいろいろな石文化が入ってきて、日本でも主役として使われる場面が増えてきた。では、いまどうやってその石を使うか——これが昨今の石材業界の一つのテーマではないですか？

——はい。どう使いたいですか？

**武藤** それは時間の経過とともに会得していくものです。ただ時間はかかります。だからやめるを得ない人も出てきます。それはいつの時代も同じです。

墓石にしても、どんなデザインにしようかと、皆さんが探しているのは知っています。私も霊園や納骨堂のモニュメントをつくらせていたり、石屋さんと一緒に仕事をすることもありますからね。

でも改めて、私の作品がキリスト教の聖地・バチカンに設置していただいたり、仏教の聖地であるブッダガヤに設置していただいたりするのを見ると、それらはいずれも宗教の原点の地です。また現在進行中のものでは、来年、宮城県石巻市に完成予定の震災復興記念公園に設置する慰霊モニュメントの制作を依頼されていますが、それもうなれば、お墓と同じ意味を持ちますね。

そういうことを考えると、やはりつくる側、供給サイドがいろいろな提案をすることが、これからはもっと必要だと思います。

——参考までにお聞きしますが、先生のお墓はもう建てられていますか？

**武藤** 故郷の宮城県に先祖代々のお墓がありますが、バチカンでもブッダガヤでも、もう自分のお墓をつくったようなものかな(笑)。アメリカのネイティブ・アメリカンの聖地・デビルズタワーナショナルモニュメントに設置されたのも、先住民の方々のお墓といえますからね。不思議なもので、「生命」をテーマに制作しているからなのか、世界各地のそういう、魂に関する場所には自然に呼ばれていますね。何もお墓をつくりたくて彫刻を始めたわけではないのですが、いまになって考えてみると「なるほどな」と思いますよ。

「惚れた石があるから彫る」

——石の魅力とはどういうものなのでしょうか？

**武藤** 私の場合には大理石になりますが、それはやはり先ほどお話しした「生命」でしょうな。それと適度なやわらかさがあり、石目が美しいということ。また大理石は世界中に何百種類とあって、白だけでなく、黒、ピンク、ブルー、グリーン、赤など、いろいろな色があるんですね。その時々(ときどき)にどの石を使って作品をつくらうかという思いに込められるだけのバリエーションがあるのも楽しいですね。

でも、やはり相性がいいいんでしょうな。



作品「CIRCLE WIND(風の環) -N.Y.9.11慰霊モニュメント-」  
(2011年、イタリア産大理石)  
アメリカ同時多発テロの慰霊モニュメント。ニューヨーク市のジャ  
パン・ソサエティーでプレビュー展示した

私は石との出会いを求めて、世界中をまわっています。好きな石を、わざわざ自分から探しに出かけているのです。もうそこに石があるから彫っているわけではない。そこが大きく違うところですね。

これからは日本の彫刻家も、石屋さんも、自分が「この石でつくりたい」という石を選ぶような姿勢を持つことも必要ではないかと思えます。

「昭和の森」 自体は、昭和飛行機工業(株) (東京都昭島市、田沼千明社長) が保有する広大な土地の一部で、同社が大事に手入れして森を守っています。ただ単に森を整備するだけではなく、「もっと魅力的な森にしたい」という彼ら

「昭和の森」というのは自然環境の保護が目的で、住宅や施設などをつくることができませぬ。そういう森は、実は日本にはいっぱいあつて、でも経済的効果がなければ維持していくのも大変で、森がジャングルのように荒れたり、朽ちていくことも多いそうです。

「昭和の森」の構成のあり方です。一つは、彫刻園の構成のあり方です。

「昭和の森」というのは自然環境の保護が目的で、住宅や施設などをつくることができませぬ。そういう森は、実は日本にはいっぱいあつて、でも経済的効果がなければ維持していくのも大変で、森がジャングルのように荒れたり、朽ちていくことも多いそうです。

### 日本初の「武藤順九彫刻園」

東京・昭島の「昭島・昭和の森 武藤順九彫刻園」を拝見しました。ゆたかな森と先生の

作品とがとつくる空間に感動しました。

「武藤 すごくいいだろう? (笑) あの「彫刻園」は日本初の彫刻公園です。なぜ日本で初めてかという点、切り口は二つあります。

一つは、彫刻園の構成のあり方です。

「昭和の森」というのは自然環境の保護が目的で、住宅や施設などをつくることができませぬ。そういう森は、実は日本にはいっぱいあつて、でも経済的効果がなければ維持していくのも大変で、森がジャングルのように荒れたり、朽ちていくことも多いそうです。



大理石を探して世界中をまわる

これが私の姿勢です。だから、これは石屋さんにも聞いてみたいことですが、皆さんのなかには代々石屋を継いでいる方もいらっしゃいます。でも「本当に、その石に惚れているの?」と。産業としてあるから石屋をやっているのと、石に惚れているから石屋をやっているのでは、根本的にまったく違いますからね。

私は石も好きだし、木も好きだし、紙も好きで、好き嫌いは何もありません。食べ物も同じで何でも食べる(笑)。ただそのなかでメニューがあり、どの石を使おうかと選ぶとなると、やはり大理石になりますな。

「花崗岩で彫ろうとは思われませんか?」

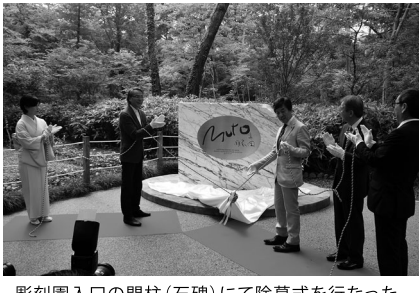
武藤 魅力を感じませんからね。立体をつくるという楽しみだけなら、みかげ石でも、その他の石でもわかりますよ。

でも、その素材に魅力を感じなければ、私の場合は手が動きませんからね。なぜなら、心が

動かないから。石材業界の皆さんにも「ウチの石でつくってください」といわれることがあります。でもまずは石を見てから決めます。それでなかなか、「この石でつくりたい」ということがいまのところはありません。

その点は、私がものすごくわがままで自分でも思うところで、日本の石にもいい石はいっぱいありますよ。でも私は「石があるから彫る」という考えではないのです。

「惚れた石があるから彫る」



彫刻園入口の門柱(石碑)にて除幕式を行なった。門柱はイタリア産大理石(約4.5トン)で、武藤氏直筆の文字が使用されている



テレビ、新聞社などの取材に応じる武藤氏



全国から400名以上が集まり盛大に開催された祝賀会



挨拶する昭島市・白井伸介市長



挨拶する昭和飛行機工業(株)・田沼千明社長



乾杯の御発声は昭島市商工会・平畑文興会長(昭和の森芸術文化振興会理事長)



閉会の挨拶をする昭和の森芸術文化振興会・福持克之助会長

※写真はいずれも編集部撮影

# 「昭島・昭和の森 武藤順九彫刻園」 6月9日にグランドオープン!

前日に除幕式と全国から400名以上が集まって開園祝賀会等を開催

「昭島・昭和の森 武藤順九彫刻園」(以下「彫刻園」)が六月九日、グランドオープンした。その前日には昭島市、昭和飛行機工業(株)、一般社団法人「風の環」、昭和の森芸術文化振興会等の関係者、そして武藤順九氏も出席して竣工式、除幕式、開園記念祝賀会が開催された。祝賀会には全国から四百名以上が出席。「彫刻園」の開園を盛大にお祝した。



壇上で彫刻園への思いを語る武藤氏と、一般社団法人「風の環」・武藤典子理事長

「彫刻園」は、東京都昭島市内の昭和の森(昭和飛行機工業保有)内、都市型リゾートホテル「フォレスト・イン 昭和館」の北側に隣接する樹林地に誕生した。行政・民間企業・団体、そしてアーティストの三者が、自然と武藤氏による彫刻作品(アート)との融合により魅力的で創造的な空間として森(自然)を維持管理し、全世界に向けて発信しながら成長させていくことを大きな目的としている。

祝賀会で武藤氏は、この「彫刻園」への思いを次のように語った。

「私は世界中を見てきて、日本人独特の自然観・宇宙観は世界に誇れる素晴らしいものと思っっている。ヨーロッパで四十六年過ごしているが、私のアイデンティティを形成しているものの一つが、生まれ育った日本の自然であるのは間違いなく、自然への思い、そして生命を敬う思いを、私は自身の作品に込めてきた。そして小惑星・地球のなかで人類は何を願うのか、動物や植物は自然のままに共生するが、なぜ人類はそれを実現できないのかを問いかけてきた。そのようなことを背景に、私は、自分の祖国である日本で自然環境を大事に思いながら作品を置けないかという夢を持っていた。それが今回ご縁をいただき、官民が一つの同じ目的を持ち、多くの皆様にご協力をいただいで、「彫刻園」というすばらしい空間で実現できたことは感謝に堪えない。

日本の文化行政は、残念ながら世界では遅れている。文化とは私たち一人ひとりの生活そのもので、そのなかには政治も経済も、そしてアートも含まれ、そこで個々の美意識が育まれ、それが個性となり、その総合体が国の文化となり、その国を成長させる。

この「彫刻園」は官民が協同して日本人の自然観、宇宙観を世界に発信し、文化を育む日本初のプロジェクトになった。その意味はとても大きい。

だから「彫刻園」の主役は、あくまでも自然。九点の私の彫刻は、まさに「森の妖精」になる。そこにはミュージアムのような押し付けは不要。四季折々変化する自然のなかで妖精たちは生き続ける。

ぜひ一年を通じてご来園いただいで感動を味わい、またお友だちなどと来ていただいで、一人でも多くの方とこの感動を共有してください。そしてこの彫刻の森を紡いでいただくことを願います。

の将来に向けたコンセプトのなかに、「子どもや大人がアートを身近に楽しめる森をつくりたい」という夢があり、今回の「彫刻園」のプロジェクトが生まれました。

縁があつて私たちが出会い、「彫刻を森のなかに置いて皆さんに楽しんでもらいたく」と動き始めたわけですが、そこには当然、森を守るという視点で昭島市の協力も必要になります。つまり行政と、昭和飛行機工業などの民間企業・団体、そしてそこにアートが加わり、民+アーティストが協力して彫刻公園をつくり、運営し、文化を発信するという日本で初めてのプロジェクトが生まれたのです。

まだオープンしたばかりですが、これが成功すれば、いま地方の活性化が課題の一つであり、いい意味で最初のモデルになるはずですよ。

## 大理石のメンテナンス技術を日本の石文化のために伝えたい

そしてもう一つ大事なことは、これも日本で初めてですが、森のなかに大理石の彫刻を半永久的に設置するわけですから、そのメンテナンスの仕組みづくりが必要になりました。

「彫刻園」として、森のなかに彫刻を置く一番のネックは樹木です。木は呼吸しながら樹液を出すので、それが作品に付着し、そこに汚れが付く、しかも日本の場合は大気汚染もあるから、どんどん汚染されていきます。これはヨーロッパでも同じで、だから普通は誰も森のなかに彫刻を置きたがらないのです。

では、「彫刻園」ではどうするか。大理石の彫刻にとつての悪条件がそろわないで、いかにして作品を維持していくか——という視点での研究プロジェクトが、これも官民協同で実はもう始まっています。

これは日本人の価値観や美意識といえますが、日本の石文化はどちらかというと、わざわざ苔を生やしたり、朽ちていっていいという考えがありますね。それは日本人の感性で、日本における石に対する姿勢の一つです。

でもヨーロッパでは違い、いかにメンテナンスしていくかを重視しています。石のお掃除ですね。自宅を掃除するということは、まさに大理石を掃除するのと一緒だから、そこにクリー

●昭島・昭和の森 武藤順九彫刻園  
所在地 東京都昭島市昭和の森フォレスト・イン 昭和館(北側樹林地) ※入園無料  
お問い合わせ先 TEL 042-546-1105(昭和の森芸術文化振興会事務局)  
<https://www.june9-showa-no-mori-akishima.jp/>

**昭島・昭和の森  
武藤順九彫刻園**

自然ゆたかな森のなかに作品を置き、うつろう木洩れ日のなかで四季折々に表情を変える武藤氏の作品9点を鑑賞できる

作品タイトルは、上段が「MALE AND FEMALE」、下段右から「CIRCLE WIND」、「DISK WIND」、「CIRCLE WIND -PAX2 003-」 (編集部撮影)



※口絵8～11頁に各作品のカラー写真を掲載しています



ピエトラサンタの工房にて

ニングやメンテナンスの技術が生まれる。残念ながら日本にはそれがなく、イタリアが世界一の技術、ノウハウを持っています。それです、「彫刻園」では第一弾としてイタリアから優秀な職人を呼び、設置前の作品にコーティングを施し、また普段は当然、野鳥のフンなども付着しますので、そういう汚れを石に染み込ませないためのメンテナンス方法などに

を教わりました。これはイタリア側にもチームを組んでもらって、今後も毎年一度はクリーニング期間を設け、来日してもらうことになっていきます。

そしてこれもまた重要なことですが、私たちはそこで得る成果を自分たちだけのノウハウにするのではなく、日本の石材業界の方とも共有したいと考えています。イタリアのプロが教え

る大理石クリーニング・メンテナンスのワークシヨップなどを開催し、業界の皆さんにも参加していただきたいと考えています。これが実現すれば、今後の日本の石文化が前進するためのとても大事な第一歩になるはずですから、『月刊石材』もお手伝いくださいよ！

**押し付けではない鑑賞を**

「彫刻園」では四季はもちろん、朝夕など時間の経過によっても作品の表情や景色が変わるのが、とてもいいですね。

武藤 園内の通路やその周辺の植栽などは新たに整備しましたが、年月の経過とともに、これからどんどんよくなりますよ。木が茂って、花が咲いて、また紅葉や雪の景色もすばらしいでしょうね。だから皆さんには「一度見て終わりではなく、一年を通じて見に来てください。四季折々に楽しめますよ」と話しています。

それと普通のミュージアムは、いつも同じライティングで、同じ状況のなかに、同じ角度で彫刻が置かれていますよね。私はあれを「押し

付けの鑑賞」といっていますが、「彫刻園」では照明を使わず、自然の木洩れ日のなかで作品を鑑賞できます。作品にはそれぞれ芯棒を入れていますが、固定せずに三六〇度回転させられるので、角度を変えて見ることができ、作品のかたちも表情も変わる。頑丈にフィックスすると、地震のときなどに折れたりして危ないから、わざと動くようにしているんです。

——実際に来園者が作品を自由に回転させてもいいんですか！

武藤 いいの、いいの！（笑）。また回して戻せばいいんだから。子どもたちが楽しんで触ってもいい。手あかがついてても、そのためにしっかりメンテナンスするんだからね（笑）。

——かたちが無限に広がりますね。先生はかた

ちに対するこだわりがありますか？

武藤 こだわりというか、私の場合はメビウスの環をモチーフにした作品『風の環』(CIRCLE WIND) シリーズがありますが、でもそれも一点ずつ、すべてかたちは違います。だから、あんまりこだわりはないかな。

先にも話しましたが、「生命」のイメージか



2020年に宮城県石巻市に完成予定の東日本大震災の復興祈念公園(仮称)内に設置される予定の慰霊モニュメント制作風景。作品名は「CIRCLE WIND(風の環)一絆一」(東日本大震災3.11慰霊モニュメント)で、すでに完成している。これも官民一体のプロジェクト



左：6月8日の「昭島・昭和の森 武藤順九彫刻園」開園記念祝賀会では慰霊モニュメントの原型をお披露目し、武藤氏が思いを語った

ら入るから、「こういう生命もあるな」と思えば、かたちは無限ですね。それに一つひとつの石からもイメージが無限に伝わってくる。だから人の展覧会を見に行く必要がない。なぜなら真似する必要がないから(笑)。むしろ、いまはずい分と真似されているけど、「どうぞどうぞ真似してください」と。それでいい作品ができれば、すばらしいことですからね。

「彫刻園」でも、最初の「一」<sup>いち</sup>を始めるのは大変なことなんです。みんなもやりたいけど、リスクを負いたくないから、なかなかできない。でもこれがうまくいけば、もしかすると二番手が出てきて、それは思うようにやらせてあげればいい。「オレが先にやったんだ」ではなくて、私たちの方法を参考にしてもらって、それで世のなかの人々みんなが気持ちよくなればいい。それが私のコンセプトでもあるんです。

大きな時間の流れのなかで、みんなはちゃんとわかってくれます。「これは『彫刻園』から始まったことだ」と。だからメンテナンスも含め、「あそこから日本の石文化が変わった」といわれるくらいのこともしっかりやろうと、行

政も含めてみんなで話し合っただけです。

——設置した作品は九点で、グランドオープンは六月(June)九日ですね(笑)。

武藤 そうそう、私の名前にちなんでな(笑)。みんなもそうやって楽しみながら考えて、でも本当によくやっていただきました。

園の整備を担当した造園屋さんも、外構屋さんも、関わっていただいた皆さんが心を一つにして、本当にすばらしい「彫刻園」にしてください。この森の空間は世界に誇れるもので、いままで私が関わった仕事のなかでも最高の仕事のひとつといえます。今後は世界中から来園者があると思いますが、必ず感動してもらえらるはずですよ。

### 死ぬまで描き続けてくる

#### 絵があつていこう

——「自分で感動できない作品は世に出せない」とのお話がありました。作家でも職人の世界でも一つの作品がそれで完成かどうかという話をよく聞きます。皆さん「完成はない。満足できなご」といわれることが多いですね。

武藤 そうですね。だから、自分で納得できるまで、私は作品を発表しません。たとえば、いまアトリエに一九九三年に最初にサインをした絵があります。もう二十五年も前ですね。それはいまもずっと描き続けています。うん、もう完成かなと思っても、またすぐに壊すんだな。つまり、私という人間はいまの自分であり、明日の自分はわからないということだよ。だから自分が死ぬまで描き続けている絵があつてもいい。一生をかけて変化していく自分が、これまでどういう変化をたどってきたのかを、その作品を通して確認するわけだな。

しかし、絵に比べると、彫刻は一発勝負だからそうはいかない。それでも私は彫刻家として、自分でゾクツとするものをつくり続けるためにその瞬間を追い求めている。だからこそ、常に新しい感動を求めて石と向かい合う。そういうことだな。

——貴重なお話をありがとうございました。緊張感に感じました。(聞き手＝編集部・安田寛)

◎公式サイト「武藤順九の宇宙」

<http://www.junkyu.jp/>

